

— 目次 —

- * 理事長からのご挨拶
- * 第20回 日本形成外科手術手技学会 印象記
- * 最優秀ロゴ賞
- * 受賞者抄録(最優秀演題賞)
- * 第21回 日本形成外科手術手技学会 お知らせ

理事長からのご挨拶

日本形成外科手術手技学会
理事長 朝戸 裕貴

このたび細川互理事長の後任として本学会の理事長を拝命いたしました。本学会は20年間にわたり「形成外科内視鏡手術研究会」から「形成外科内視鏡・手術手技研究会」、「形成外科手術手技研究会」、「日本形成外科手術手技研究会」、そして現在の「日本形成外科手術手技学会」と名称を変更するとともに、日本の形成外科における手術手技の発展に寄与してまいりました。重責に身の引き締まる思いですが、役員および会員諸氏のご指導ご鞭撻をいただきながら職務を全うする覚悟でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、第20回日本形成外科手術手技学会は本年2月21日土曜日に、東海大学医学部外科学系形成外科学教授である宮坂宗男会長のもと、鎌倉プリンスホテルにおいて開催されました。早春を思わせる穏やかな晴天のもと、湘南の海が一望できる会場で各演題に対して活発な討論が交わされ、会員にとって実り大き一日であったと思われま。

本学会は形成外科の根幹をなす手術手技そのものを追求する学会であり、手技上のコツや工夫などの情報交換が、その後の診療内容の向上に結びつく非常に有意義な学会であると考えております。

会員諸氏におかれましては、今後できるだけ多くの若手形成外科医に対して本学会への入会・参加をお勧めいたしますようお願い申し上げます。

第 20 回 日本形成外科手術手技学会 印象記

会長 宮坂 宗男（東海大学医学部外科学系形成外科学内）

2015年2月21日(土)において、記念すべき第20回日本形成外科手術手技学会ということで、古都鎌倉(鎌倉プリンスホテル)にて開催させていただきました。会員各位におかれましては、ご協力ありがとうございました。心より厚くお礼申し上げます。

今回は、「豊かな想像力と技の伝達」をテーマとして外科医にとって必要なことは、手先の器用さでなく、知識をもとに想像力を働かせること、また技を伝達し、継承することが大切であることを知っていただくためのプログラムと致しました。

特別講演には、日本泌尿器科内視鏡学会理事長である寺地敏郎先生に「術者の育成-スキルの継承-」のご講演をいただき大変勉強になりました。

シンポジウムは、「顔面骨骨折のピットホール」、「ビデオで伝えたい私の美容形成外科手術」、「乳房再建における私の工夫」を取り上げて、テーマである技の伝達をしていただきました。

一般演題は78題をいただき、特別講演、シンポジウムを合わせると94題のご発表をいただきました。参加人数は239名(学生2名,前期研修医3名)でした。

企業展示は24社で特に展示したダビンチ操作を14名の形成外科医が行い、普段顕微鏡下の手術をおこなっている方は、すぐにダビンチ操作に慣れることがわかりました。

ハンズオンセミナー「下顎骨骨折とロッキングチタンプレート固定の体験」は10名の定員枠にもかかわらず多数の応募をいただきました。

また学会のロゴ募集致しましたところ5つの学会ロゴをいただきました。

会期が一日で、非常にタイトなスケジュールとなり、会員の方々にはご迷惑をおかけしましたが、座長、会員の方のおかげで大変有意義な学会となりました。これもひとえに会員のみなさま方のおかげだと思い、心よりのお礼申し上げます。

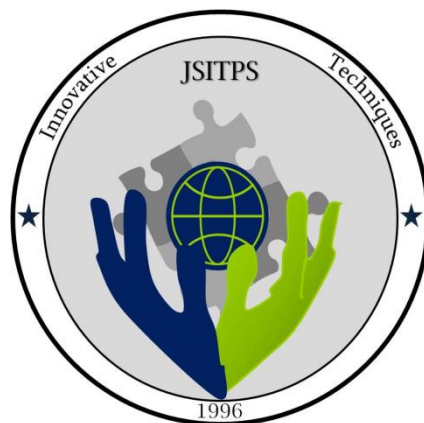
今後本学会がますます発展するためには、医学生や前期研修医への広報も必要かと思えます。本学会が日本形成外科学会会員のお役に立てるように成長していくことを祈願しております。

なお、ホームページ(<http://www.jsitps2015.jp/report.html>)にフォトギャラリーを設けました。ユーザー名・パスワード「jsitps20」でご高覧を願います。

最優秀ロゴ賞

受賞者 素輪 善弘 (京都府立医科大学 形成外科学)

第20回学術集会にて日本形成外科手術手技学会の象徴になるロゴマークを会員より募集しました。応募のロゴ案の中から理事による投票の結果、以下のロゴ案が最多の票を獲得し、今後はこのロゴ案をベースに一部修正の上、学会の正式なロゴとして採用する予定です。受賞者の素輪先生には第20回大会校より表彰状と賞品を授与致しました。



【ロゴの説明】

Innovative Technique は手術や処置などの実践において、操る両手先の特殊な空間、創造的な世界から生み出される。抽象的な創造をパズル、世界を地球儀で表現。また世界に通用する手術手技がうみだされる可能性も暗に示している。

最優秀演題賞

0-18 手指手術における改良型鉛の手

金沢医科大学 形成外科

島田 賢一、岸邊 美幸、山下 昌信、台蔵 晴久、川上 重彦

【はじめに】

鉛の手(lead hand)は、手の手術時にすばやく簡単に術野を展開、保持する安価な道具である。滅菌することで再利用が可能であり、手外科領域では広く用いられ市販されている。今回、改良を加えた鉛の手(seven fingers hand、ケイセイ医科工業製、東京)を、実際の臨床に使用したのでその有用性について報告する。

【改良点】

従来から市販されている鉛の手に、示指橈側と小指尺側の2カ所に短冊状のピース(30×150mm)を追加した。使用方法：追加したピースを折り曲げて使用することにより、術野の展開と保持が容易となった。具体的な使用方法として、1. ピースを手術台に接地して用いる。2. 余剰ピースを用いて直接術野を展開、保持する。3. ピースにフックなどを固定することができる。

【考察】

鉛の手は1948年にFiskがはじめて報告したとされる。現在、欧米ではBrueckmann Ortho Lead Handが一般的なモデルとして頻用されている。また、本邦においてはケイセイ手形板(ケイセイ医科工業製、東京)として市販されている。

今回の工夫は2本の長いピース(追加指)を示指、小指の直角方向に追加した点である。一般的な鉛の手においては、術野を展開するためにそれぞれの指のピースを用いて、対応する同一指を固定するのみであった。しかし、今回追加された長いピースは単に指を押さえるだけでなく、牽引したり、支えたりすることができる。また、示指、小指以外の指(母指、中指、環指)の術野を展開することが可能である。これにより、術野を長時間にわたり容易に一定の姿勢に保つことが可能となる。手外科手術においては、単独術者による手術が多い。その際、この改良型鉛の手(seven fingers hand)は非常に有用であった。

本器具は、手の術野の展開や維持を容易に行えるだけでなく、安価で繰り返し使用可能であることから、手外科手術においては非常に有用な器材である。

0-20 一次性下肢静脈瘤に対する血管内視鏡下表在静脈弁形成術および静脈節移行術-5年の治療成績-

東京女子医科大学 形成外科

佐々木 友美子、長谷川 祐基、長田 篤祥、堀 圭二郎、藤原 修、八巻 隆、櫻井 裕之

【目的】

表在静脈不全に対するsparing surgeryに関する報告は非常に少ない。我々は大伏在静脈(GSV)の温存術式としてangioscopic valvuloplasty combined with axial transposition of a competent tributary vein(A-VACT)を報告してきた。今回、術前のDuplex scan(DS)による逆流所見から、弁形成術の適応症例を検討した。また、A-VACTの5年での治療成績を報告する。

【方法】

検討1：GSVのsubterminal valveの形態分類を行った117例153肢。予め大腿静脈-大伏在静脈接合部(SFJ)における逆流評価をDSで行い、術中にGSVのsubterminal valveの形態と比較した。Subterminal valveの形態はHoshinoらの分類でType IおよびIIのものを弁形成術の適応とした。検討2：検討1で得られた結果を下に、A-VACTを施行した67例76肢。まず大伏在静脈のsubterminal valveを血管内視鏡下に形成術を行った。次に大腿部において不全を有しない分枝静脈節を大伏在静脈に端側吻合し、大伏在静脈は分枝静脈の合流部と吻合部の間で結紮した。

【結果】

検討1：Type Iが33肢、Type IIが56肢であった。Type I・II症例はType III・IV症例と比較し有意にSFJの直径および最大逆流速度が小さく、直径<0.9cmおよび最大逆速度<30cm/sにおけるType I・II弁の存在する可能性は感度90%、特異度67%であった。検討2：SFJの直径<0.9cmおよび最大逆速度<30cm/sをA-VACTの適応とし施行した結果、SFJおよびGSVの直径は術後有意に縮小した。5年間の一次累積無再発率94%であった。

【結論】

A-VACTの適応症例は限定される。しかし適切に症例を選択すれば、表在静脈温存術式として有用と考えられた。

第 21 回日本形成外科手術手技学会 お知らせ

会長 三鍋 俊春 (埼玉医科大学総合医療センター)

会員の皆様、第 21 回日本形成外科手術手技学会は 2016 年(平成 28 年)2 月 13 日(土)に埼玉県さいたま市の大宮ソニックシティで開催させていただきます。21 回目のテーマは、「成功する手術」としました。第 19 回亀井会長、第 20 回宮坂会長が掲げた「技の伝承」「技の伝達」を受け継ぎつつ、さらに、失敗しない手術、成功率 100%の手術を目指そうと意図しました。手術を成功させるには、技術の鍛錬に加えて、術前の創部のプリパレーションや評価、周手術期の薬剤治療や補助治療も極めて有用と考えます。また、外科治療と非外科的治療の対比も重要と考えます。形成外科の各サブスペシャリティーの専門家の秘訣や蘊蓄をご披露いただくとともに、新進の先生方のフレッシュな創意工夫もご発表いただけますと意義深い学会になろうかと考えます。また、特別講演は東京大学医学部を卒業し臨床に従事するとともに、若くしてサイエンスコンピューターグラフィックの分野でご活躍の瀬尾拓史先生にお願いする予定でおります。

大宮での学会開催は多々あると存じますが、2015 年 3 月に北陸新幹線開業と同時に上野東京ラインも開通し、品川東京方面からのアクセスも格段に便利となります。学会終了後は、「武蔵国一宮」の氷川神社から地名となった大宮で楽しめるのもよし、都心に即行して新宿、銀座のみならず青山、西麻布グルメを味わうのもよし、存分にアフターコンGRESSもお楽しみいただけるものと存じます。もちろん、多くの地域から日帰り可能圏とも考えます。

大役をつとめさせていただくにはまだまだ役不足の教室ですが、会員の形成外科医にとって楽しく有意義な学会になりますよう一同全力を尽くす所存でございます。多数の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

では、大宮でお会いしましょう！